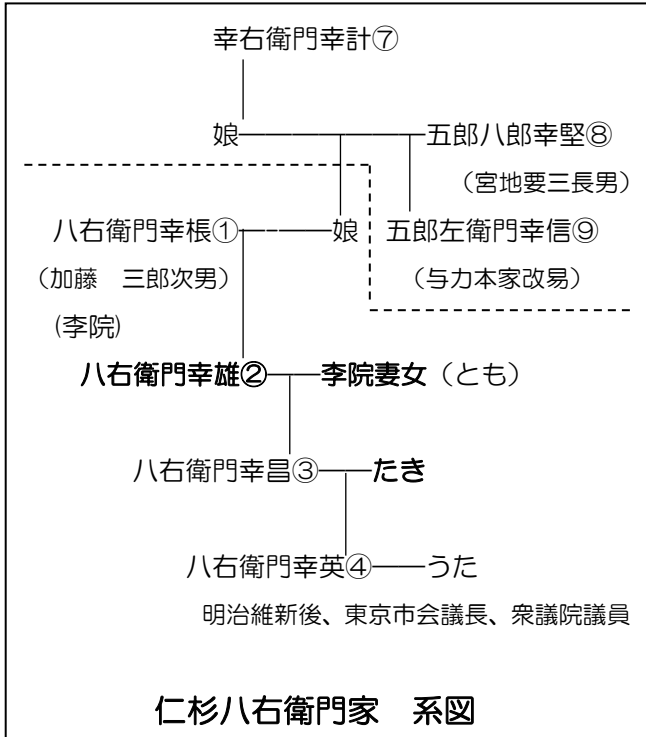


## 仁杉李院妻女の江の島紀行



佐賀大学図書館に「扇譜」という古文書がある。著者は仁杉李院となっているが、これが仁杉家のどの人か特定できなかった。

一方、千代田区立四番町歴史民俗資料館の仁杉家文書の中に、八右衛門幸昌の妻たきが書いた「江の島紀行」という旅日記があり、この中に

「母君、鎌倉鶴が岡八幡宮より江の島詣での道すがら、名所古跡のお物語、(中略)、よき折もあれば参詣いたしたく年月思っていたが、はからずも清川氏の誘いで、(中略)卯月出立(後略)」

とある。これにより、たきの母(義母)も江の島・鎌倉へ旅行していた事がわかった。

この「母君」の紀行文を探していたが、鎌倉市の地元雑誌「鎌倉」に、李院妻女なる人の旅日記「江の島紀行」が所収されている事がわかった。

鎌倉市中央図書館で現本を見たところ、裏表紙に

「仁杉」とあり、更に朴園陳人なる人の跋文に、この紀行文の筆者が「仁杉李院の妻」である事がわかった。

旅程もたきの旅日記の記述に一致しており、この著者がたきの義母、すなわち八右衛門幸雄の妻であり、その夫が「李院」であるとの跋文の記述から「仁杉李院」は仁杉家八右衛門家の2代目の幸昌と特定できた。

この妻女の名は不詳であるが、仁杉家過去帳によれば、安政6年8月20日没、法名智明院殿操月貞光大姉とあり、法名の最初の字をとって、「とも(智)」と仮称する。

八右衛門幸雄は文化13年(1816)8月に与力見習として南町奉行所に出仕、長く吟味方与力を勤め、天保13年(1842)に最高役職・年番方に就任している。安政3年6月に死亡する直前までその職にあった。

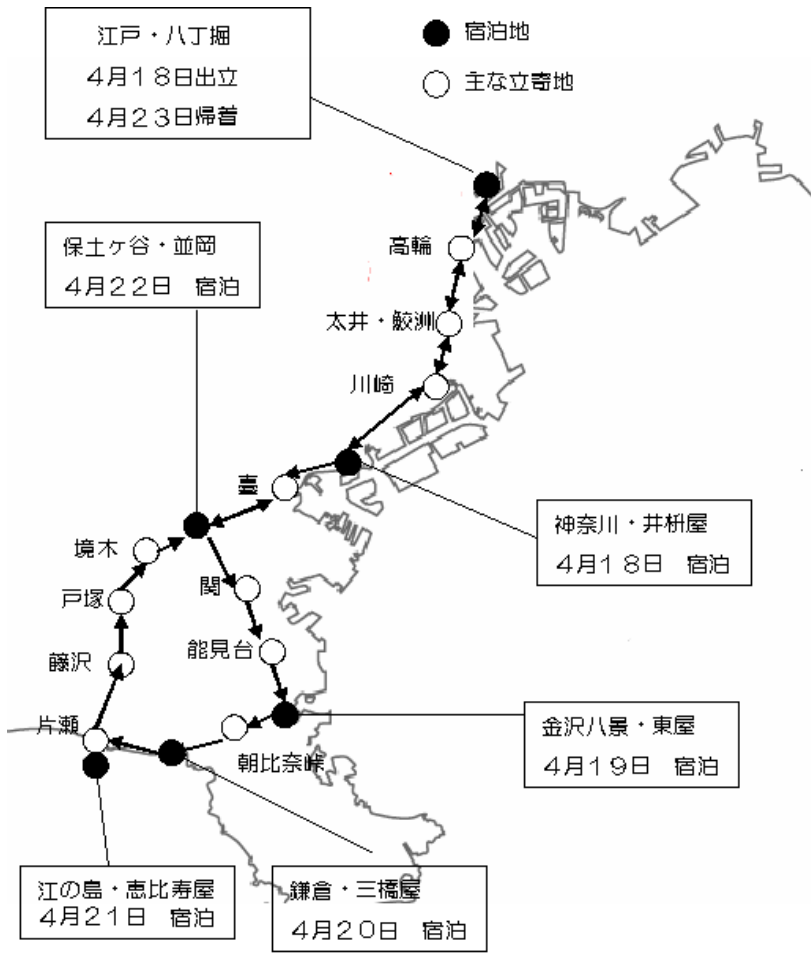
八右衛門は与力職務の余暇に扇面を蒐集しており、この中には後陽成天皇宸翰の歌を始め、公卿、大名、学者、僧侶、画家など著名人の扇面を千点以上も集め、「李院」という号でその目録をまとめた。それが上記「扇譜」である。

### 李院妻女(とも)の江の島紀行

安政2年(1855)の4月18日早朝に江戸・八丁堀の屋敷を出発、保土ヶ谷から金沢道に入り、能見堂を経て金沢に入り、東屋に宿泊、翌日は朝比奈切通しから鎌倉に入り、多数の神社仏閣に参詣、長谷の三橋旅館に宿泊。21日の朝、長谷界隈を見物後、江の島に渡り、恵比寿屋に宿泊。22日に江の島を出立、23日の夕方に帰着している。

この翌年、夫の八右衛門(李院)は死亡しているが、死亡直前まで年番与力職にあったから、この妻女は夫が町奉行所与力の現役の時に4泊5日の旅に出ている事になる。

なお、旅から帰って半年もたない10月、大地震(江戸安政地震)が発生、八丁堀の仁杉八右衛門拝領屋敷も大被害を受けている。



金沢・瀬戸橋際にあった東屋

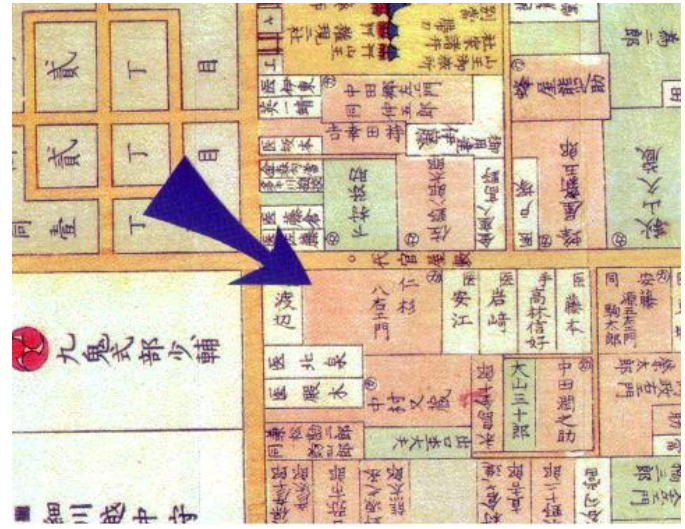
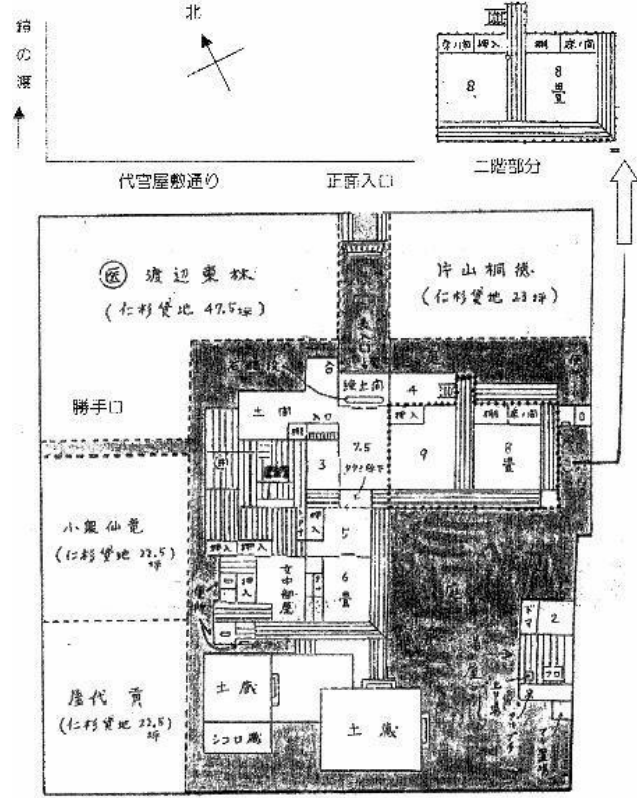


鎌倉・長谷にあった三橋旅館

ともが住んでいた八丁堀の屋敷

仁杉八右衛門の拝領屋敷は南北奉行所与力 50 人の組屋敷が並ぶ八丁堀の北、山王神社の近い代官屋敷という通りに面していた。

敷地約 3 百坪だが、江戸後期には医者、儒者、手習い所などに貸して地代をとることが暗黙で認められており、仁杉家でも北側正門、東側勝手口以外の



通りに面した部分 115 坪を貸していた。 屋敷は母屋が 62.5 坪 (うち 2 階部分が 17.55 坪)、土蔵が 20.45 坪、湯屋が 4.7 坪であった。 この外に八丁堀内に「足地」と呼ばれる拝領地面が百坪ほどあり、これも町人に貸して地代をとっていた。

町方与力の地位は低く俸禄は 2 百石であったが、これらの地代・家賃収入に加えて、大名・旗本・大店などからの定期的な付け届けで、生活は大変豊かだったといわれている。